

入ると仏教の本地―垂迹のコスモロジーに組み込まれて合理的性格を強め、彼岸の仏の垂迹に救済者としての性格を強めていく。

中世までは神になることのできる人物は、生前に特別の地位にあつたり、あるいは大衆に強い印象を残したりした人々だった。それに対して、近世になるとはじめて一般人がカミとなる信仰が登場する。各地に残る人柱伝承や義民伝承は、みずからの意志によって身を犠牲にした人物をカミとして顕彰するシステムであり、中世の御霊信仰とははつきりとした断絶があった。湯殿山などの即身仏信仰も同様だった。

そうした時代風潮のなかで、国学や垂加神道の学者たちは、仏教・朱子学いずれの教説とも異なる、日本固有の世界観に立脚する独自の安心論の構築をめざした。その結果誕生した教説が、生前に神としての天皇に忠誠を尽くすことによって、死後は自身も神となつて八百万の神の末席に列なり、永く国土と天皇を守護することができるという主張だった。忠君の霊魂が天皇の藩屏となつて永遠にこの国土に留まるとする、招魂社を経て靖国の論理まで直結する論理が、ここによりやく成立するのである。

石塔の思想史

――五輪塔を中心に――

松尾 剛次

本報告の狙いは、塔高二メートルを越える巨大五輪塔に注目して、五輪塔が制作された宗教思想史を明らかにすることにある。日本中世は、石塔の世紀と呼べるほど、数多くの石塔が建立された。板碑、宝篋印塔、五輪塔などが全国各地に制作され、現在も残存している。とくに、中世末には、数多くの小さな墓塔が制作されていた。

本報告では、鎌倉時代後・末期、すなわち十三世紀末から十四世紀初頭に制作された五輪塔に注目する。近年、中世考古学研究の深まりにともない、全国の石塔が収集され、それらを制作した職人集団（石工集団）、教団との関係などについての研究が大いに進展している。しかしながら、それらを生み出した人々の石塔に託した思いなど、いわば石塔の宗教思想史については、近年、千々石到、菊池大樹、佐藤弘夫らの優れた研究があるにしても、緒についたばかりといえよう。本報告では、宗教思想史研究の素材として中世の石塔、とくに五輪石塔を取り上げる。五輪石塔というのは、石を五つ積んだ墓塔である。本報告において、石塔の中でも五輪石塔に注目するのは、従来、佐藤弘夫の思想史的研究に見られるように、板碑は注目されてきたのに対して、五輪石塔は、さほど注目されてこなかったからである。

パネル

中世において五輪石塔は、数多く制作されたが、私が注目したのは、鎌倉後・末期（一三世紀末から一四世紀初頭）の塔高二メートル以上の巨大五輪塔である。そうした巨大五輪塔に注目するのは、以下の理由による。まず、五輪塔には、銘文が書かれていても、風化などによって、摩滅し、読めないものが多いが、巨大五輪塔のいくつかは、文献史料や五輪塔納入物から、五輪塔を建立した人々の思想などがわかる場合もある。

また、そうした巨大五輪塔は、全国に一〇二点が所在する。とくに、鎌倉後・末期に制作された五輪塔は、数多く（七〇点ほど）残っているが、花崗岩・安山岩といった堅い石を使い、西大寺様式という特有の形式を備えているのが多い。以上のような理由から、鎌倉後・末期の二メートルを超える巨大五輪塔に注目する。

さて、その時期の巨大五輪塔に注目すると、それらの多くが中世律宗教団の手になるものであることに気づく。すなわち、大部分が、考古学の方でいう、いわゆる西大寺様式の五輪塔なのである。その様式の形態的特徴とは、以下の六点である。①空・風輪が大きい、②側面から見たとき地輪・水輪・火輪の端が縦に一直線に並ぶ、③火輪軒端の反りが強い、④空輪の幅がほぼそろい、丸みを持った宝珠形を呈し、縦長にならない、⑤火輪軒厚が比較的厚い、⑥水輪最大径が中央付近に位置する。

私は、巨大五輪塔（調査できたのは五九例）の水輪に注目し、画像処理をすると、各々、巨大五輪塔の水輪が重なるものがあり、それらが三系統に分類できることを見いだした。いずれも、西大寺末寺の律宗教団の手になると考えられる。そこ

で、律宗教団石塔の建立思想を検討してみた。五輪塔の地輪下から発掘された骨蔵器の銘文などを分析してみると、すなわち、律宗教団は、弥勒信仰に基づいて五輪塔を制作していた。弥勒仏は、都卒天で修行中で、釈迦の死後の五六億七千万年後に、この世に下生し、三度説法し、人々を救済すると信じられていた。律宗教団は、そうした弥勒信仰に基づき、弥勒下生の時まで持つように、堅い花崗岩・安山岩製の石塔を制作し、銅製の骨蔵器に火葬骨を収めた。それゆえ、五輪塔の下火葬骨とともに、死者の靈魂は眠っていることになる。こうした考えは、現在の我々の、墓の下に眠る死者の霊という考えと繋がるものであるといえよう。

実験動物供養の起こりと展開について

岡田 真美子

故中村元博士は『日本人の思惟方法』のなかで「（日本では）最も進んでいる医学者たちでさえも、実験のために殺した動物のために慰霊祭を行なう。西洋にはこういう習俗は存在しない」と述べている。基盤研究(B)「『供養の文化』の比較研究を通してみる「死」の表象の形成過程とその現代的変容」の中村生雄研究代表（当時）は、このような実験動物供養の起こりと展開を探索することを連携研究者岡田に依頼し、合わせて韓国の実験動物供養の研究者として知られていた Elmer